



レビー小体型認知症サポートネットワーク福岡 第 15 回研修会・交流会



2019年6月13日(木)に天神・BiVi福岡で、協力医 合馬慎二先生の司会のもと、DLBSN福岡の第15回研修会・交流会を開催しました。顧問医の坪井義夫先生のレクチャーと、認知症看護認定看護師の岩本さんの特別講演、グループワークを行いました。35名の参加があり、このうち初参加が17名でした。

レクチャー「レビー小体病のつき合い方」

顧問医である坪井先生から、レビー小体型認知症のつき合い方に関するレクチャーがありました。レビー小体型認知症は、うまくつき合っていくことで症状が穏やかになる病気です。まず、全身管理として、高血圧や糖尿病といった生活習慣病の管理、うつや不安といった精神症状、睡眠時無呼吸やむずむず脚症候群といった睡眠障害、起立性低血圧や頻尿といった自律神経症状のコントロールが必要となります。それに加え、レビー小体型認知症は、アルツハイマー型認知症に比べ、運動障害関連の日常生活動作障害が強く出ます。そのため、着衣、歯磨き、入浴、トイレ、移動などが難しくなることがあります。また、妄想や幻覚、不安などが原因となる精神症状があり、介護者の方の負担は大きくなっています。短時間の運動習慣の効果について具体例を用いて示され、日常生活動作、薬物療法と合わせ継続することの大切さをお話しされました。

特別講演「もの忘れ外来で大切にしていること」

福岡大学病院認知症看護認定看護師の岩本知恵美さんから、物忘れ外来での多職種連携について紹介がありました。次に、私が失敗から学んだ「ぶれない関わり」として、岩本さんが実際に体験された、認知症の方との関わりの失敗例が紹介されました。そこでの学びから、ご本人の言葉に耳を傾け、その言葉を繰り返すことの大切さがお話しされました。

グループワーク

顧問医の坪井先生、協力医の合馬先生の2つのグループに分かれ、椅子を囲んでディスカッションを行いました。その一部をご紹介します。

- レビー小体型認知症は、診断にたどり着くまでに時間を要することが多く、ロスタイムが多い病気である。そのため、ご本人が疲れ果ててしまうことがある。少しでも楽になる方法、ご本人の思いを理解して対応する方法について共有しました。
- 受診したがないご本人に対し、医療へ結びつける方法として、ご本人の楽しみとなる外出と組み合わせること、信頼できる第三者から促してもらうこと、脳の健康診断として受診してもらうといった方法が提案されました。
- 幻視があるため精神病院へ入院中のご本人が、家に帰りたがっている事例が紹介されました。薬物管理ができる場合は在宅も可能であるが、難しい場合は入院しながら薬物治療でコントロールし、試験外泊をして在宅へ繋げてはというアドバイスがされました。

お知らせ

- 福岡県主催の介護と仕事の両立「休日街かど相談」が県内各地域のショッピングセンターで開催されます。問い合わせは、090-1519-3023（麻生教育サービス株式会社）
- ケアメンスキッチンが、7月2日（火）11時30分～14時に山口油屋福太郎で開催されます。問い合わせは、西尾（m-nishio@jrckicn.ac.jp）

次回は、福岡県若年性認知症支援コーディネーターの中村益子さんから「福岡県若年認知症サポートセンター」について講演を行って頂きます。

次回の研修会・交流会は、2019年9月19日（木）18時～ BiVi 福岡です。



報告者：DLBSN 福岡 副代表坂梨左織